風俗文選

序目 一

三十七号
二十七番

へ 5
5610
1

本朝文選

昭和十六年一月十一日寄
尾野貴美武贈

門へ6
號5610
巻1

五老文庫

五老井許六選

風俗文選序

月澤　律師李由述

亀縁乃羽衣子。五老井の許子ハ。滑稽俳諧新古乃文章を拾ひ集めて風俗文選と題せむとしや。かれ文苑集めてこの撰を

本朝文粋といへる。我おもふに文粋ハ。本朝の人の述作にして。文乃体やはらかく

漢文なるへし。今謂ところの文選は。和書乃
文章ましく其体をのへたり。漢文にまれ
へきむしろは。やまと詞にかしこき言葉と
双紙物語のたくひのことくにして。
本朝の文章とし称するにあらて。今此風
俗文選のことくなるへし。夫漢文にも。文字の
数を定め。韻をふみて。其格よりきびしき端
（…）へしされと同し文章をよへて。文選と古文

と心記する所。其体に違あれは。漢文とて
も恠ならざるを免かれず。まして和文といへは文字
の数さたまりあらず。韻字とてもなし。ゑらぬを。
古来の蘭賦に。其書の面のかきりをして韻を
ま是和文に。韻をふめる一格なれは。あなかちに
韻をと見るにもよらず。其心に志さるにて自
由なるへし。同し体を見て何となく。其の題の
趣きよくて其体をさためるを。学ぶ人

時とすべし。江東僧律師李由字買年

於四梅廬序

風俗文選序

落柹舍　去来

世に俳諧の文あれど、集と成ものハなかりき。先
師一たびこの道を立てゝ、徒まことの道にかなへる教を施し
むかしハもすのもすと世の案をとなへるゝ、今や門葉
おのおの作れる風雅に務めて、よしに、翠葉の綱紫を旋へ
文場に辭をかゝげて、人をおどろかすもの、今さら文集に斧
を入べく、雅に業門詞あれバ、終に頌讃の風流を重ぬ。
或は書あり、或は論ありて、説賊のかてを述ぶ。文謀を

姿を残せ。白居易乃才あれど。許多の跡をのこされ
ども。桃を千歳の後に施して。されバ此文章およぶ
とせバ。彼蕉子の門乃。句讀を救ふる類ならんや。
此文を志まる者ハ。此道を志る者なり。作者に倣ふ
多きなかにも称せることあり。湖東の森氏ハ予が門しるく。
虚実に何の人とも隔へし志かり。谷既名望を盛
にして。此文選を感さしめんも。宝永元旦日序

去来

風俗文選序

東華坊　支考

題して文選ある附て。吾朝に文選ならんやと。
おもしろからずや何ぞふと訪ひて。湖東の夫子。詩騒
なき事。凡文章ハ。周孔乃人を倦べ。荘孟の筆にて数
棄せず稀く。和漢に人をはふすまとせん。姿を倦ふる
ことおもく文なれ也。人をすうするをはそふへくそれなる
てふるしとおほしぬる。文章よ何乃為にあらんん。
んまて紙乃人なる也。すなハ世ょ不変化をして。変
化をまこる人をそう。深きを志ねる人といふなま。菊
人乃下に恵をまれへるも。なをつよふ風にんなされて。

すぐしたる変化をすれば人といふ虚しき穢は
源氏物語あらはせし紫式部にてあやまたぬ妻
人のあはれくあさぶ変さへ書き尽しのこしたる
べし。様はあまた。許しよはそへてと雅うはゞ。作
とは。おもくはの筆子たるもし。清少納言が枕双紙の世
見る事にあそび。誰るにおそびくぞしめ給
あらそむと見ば。いふでしるは。学問もおほえことにへ
侍ともおもむひ。見ばくばよく書きとして。なる。伊勢
物語乃。まことに聞ふなどさく。土佐日記つまり
さらに日記ハ。ものかなしきなる絶ハ。人の
見ても。えあらぬ事ども。あはれにかくおそふ読ん

し。記とも紀ともいふ。おなじく心がし。揚大納紀行ともいふ
ものもあるにや。世に平家物語といふをおもひて。
能くへをとこのなにがし紙にはあらぬをしるく。
祇園精舎の鐘乃声ふ。世の中乃あはれをしるを
出家せられるたまひ。平家物語とつまびらかにかゝれ
おもむきしるる名なるべし。鴨の何かしとか方丈
乃記にあそべる人也。発心集といふおもほえざることも
ともおほくもねすや。西行物語といふもあれども。さ
人の作にはあらずとぞ。撰集抄のこれにたがふらし
西行乃きこえたるはなして。撰者の法師ありお
えびなるべし。兼好法師のつれづれ草も

せまくしてハおもふまでも侍らんこの。硯にむかひてしおを
さしめぐらし。世情乃境目にわかちぶ合点ゆかさんしら。
何る紙にて字を称の終寫礼もおるひろて古来乃
筆色葉もおの紙しがんに何をいらぬ。むじしの
要がさ紙は書ならおとり事なし。夫ちこ紙をとそ
月にあそび。帖をこ紙をとりて花にあそぶ竃吟
まち神バ雲をおこし。虎嘯まば亦おこし。梅に鶯。
紅葉に鹿。此つまらぬものち紙侍らバをしてわきゑ
む。此川につきふハつまらね。漢にハ之乎者也の四字を
もて書紙ならずみ詞をもとむ。和にハ手爾乎波の
四字をもとむ。是ハ涼しの時題をとそのふ文字ハ

まして手尓をを波乃事をまなばざる輩ハ一句の
本紙をおもし。二句ハ句續をおもしろさまざまによむ花
鳥乃つぎて紙をよみて。海雲浪嵐晴といふ事
つき手ならん。是でおちんものやちらん。世ちこふく
書しても何そひ。文をよらむ神ても尓ふ非に
あるさ此文選乃ぬを同見てもおらむふちねなるべし
ゆらう。

寛永元年甲申臘月日

風俗文選

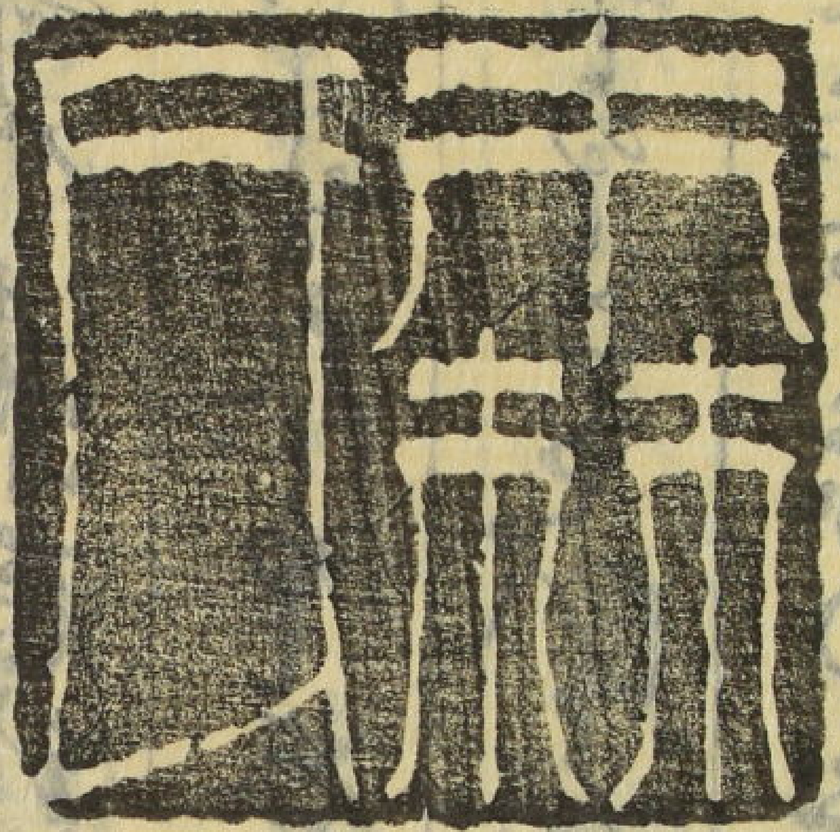
自序　　五老井許六選

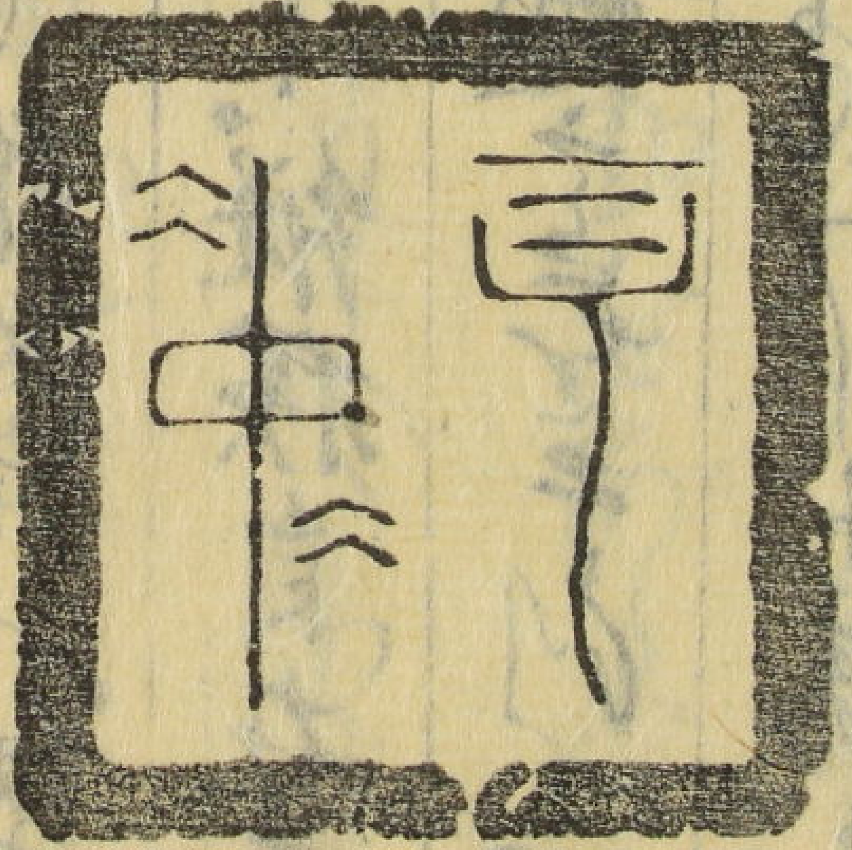
文ハ貫道の器也。孔子も筆力あらハ、これを学べといへり。吾朝往昔のむかしより、大和詞の文筆、庫にみち車にみてり。然れども、世におこなはるゝ文集、ひとへに女房の筆にして。源氏狭

衣乃きぬひ男女共中〻はなし。實ハ
哥よみならふべき道ならずなるべし。其外
歌連哥の文法にして誹諧文章なれ
格式一言もなし。先師芭蕉翁。始て
一格を立て。氣韻生動をあらはせり。
たとひ鄙言漢字をまじへたりとも。
四ゝ吉野も川田の花紅葉をとらへや

み。和哥の浦に志をよせて。難波津の細き
よしあしをたゞ里志るべし。縦横自在を
畫しまゝしさとひとへの趣をまもる所
なくてハ。高當の丸に拘はらず落く。
果ハ松坂を仕舞とせ侍る。甚だ世に事
あるべし。今此ゆ冊あらハす文章。躰も二十。
文ハ一百十有余篇。皆く誹諧文章なり。

此挑をよみ。こゝに載て。此門に入べしとて其子
表を并許子か撰に集て。寶永二乙酉歳。
自序して風俗文選しか云尓





本朝文選

○作者列傳

芭蕉翁者伊賀之人也。武名松尾甚七郎。奉仕藤堂家。壯年時辭官遊武州江戸。風雅為業。號桃青。乃誹諧正風中興開祖也。韋世為遺功。修武小石川之水道。四年成。速捨功而入深川芭蕉菴出家。年三十七。天下称芭蕉翁。遊東西南北。說風雅。助諸門人。国中悉歸芭蕉風。一遇難波津伏病。終卒年五十一。葬江州義仲寺。

浪化者。東門主一如大僧正之連枝也。號應

真院。居于越中井波瑞泉寺。一日遊洛。會芭蕉翁。效風雅。後著有礒海前後集。病薨。年三十二。

僧文艸者。尾州犬山産也。壯年辭武出家。隠机本山上。蕉門之騒客也。能詩。後三年閑関而終不出。病死。常讀法華經。年四十四。

僧千那者。江州堅田産也。居于本福寺。釋名妙式上人。掌任律師。號蒲萄坊。中華蕉門之高弟也。

僧李由字買年。近州之産也。居于光明遍照寺。釋名亮隅上人。掌任律師。入蕉門而学風雅年久。故著韻塞。篇突。宇陀法師書。病死。年四十五。

支考字盤子。號東花西花。亦號獅子庵。濃州之産也。入蕉門。業風雅。一方門人也。先師滅後。遊東西南北。説風雅而助諸生。故徃慕支考風者多矣。中遇居于勢州山田。後歸故國。作誹書數篇。辨俳諧之論。

晋其角者。武州江戸産也。生醫家。不学醫術。終業俳諧。寶井氏。號狂而堂。蕉門之一人。而後起已一風。著誹書數篇。

嵐雪者。服部氏。不知何許人。業風雅。遊武江

戸蕉門之高弟也。後別妻出家。

野坡者越之前州人。生商家居于武江戸蕉門之學者也。一遊西海不定其所居。隨師得炭俵之撰号。

北枝者加州金澤之人也。業磨土見蕉翁好風雅。北方之逸士也。

涼菟者勢州山田神職之人也。業風雅初號團友。

露川者伊賀之人也。生商家居于尾名護屋也。好蕉門之風雅。

雲鈴者奥州南部之人。産武。壯年入道自號

摩詰菴婆且人。風雅師東花坊。一渡佐渡島著入日記。

吾仲者洛陽人也。居于六條。業佛畫好風雅。師李由自號柳後園。著柿表紙三巻。

路通者不知何許者。不詳其姓名。一見蕉翁聽風雅其性不實輕薄而長違師命飄泊之中著俳諧之書。

凡兆者加州之産也。業醫居于洛。学蕉門之風雅一罪事不知其終處。

素堂者山口氏也。居于武陽避世務隱于深川。友芭蕉翁善。

嵐蘭者不知何許人。松倉氏。業武奉仕板倉
家。而奉諫速辭官。擕孥隱于武陵州。蕉門
之老弟也。為月遊于鎌倉病死。
荊口者濃州大垣之武士也。宮崎氏。蕉門故
老之士也。此節千川。文鳥。三士之父也。後
致仕改名東空。
去来者肥前之産也。後隨兄居于洛陽。向井
氏也。中華蕉門之高弟也。號落柿舎。隨師
選猿蓑。後病死年五十三。
万子者加州金澤之武士也。生駒氏。號卅君
菴。蕉門之英士也。

厚為者加州太乗寺之武士也。河地氏。蕉門
之英士也。病死。
木導者江州亀城之武士也。直江氏。自號阿
山人。蕉門之英才也。師翁称奇異逸物。
汶村者江州亀城之武士也。松井氏。字師薑。
號九葉亭。蕉門之達士也。葦能書畫。繪師
五老井。
毛紈者江陽彦城之武士也。北山氏。号大雅
堂。好風雅愛畫圖。師五老井。
程已者近州亀城之武士也。朝倉氏。号白月
堂。愛蕉門之風雅。

朱廸者江陽彦城之武士也寺島氏号苹露堂年父好風雅而入蕉門病死年四十三

撰者許六者江州亀城之武士也名百仲字羽官森川氏號五老井別号菊阿佛見今蕉翁得正風躰實血脉道統之門人也常友李由撰俳書數篇

以上二十八人

風俗文選目録

五老井許六選

○巻之一

辭類

柴門辭　芭蕉翁　瓢辭　許六

示秋之坊辭　支考　示古鏡辭　李由

送新道心辭　文艸　燒蚊辭　嵐蘭

鉢扣辭　去来　四季辭　許六

○巻之二

賦類

南都賦 汶村 鎌倉賦 許六
吉野賦 丈艸 松嶋賦 芭蕉
冨士賦 嵐蘭 湖水賦 李由
前麿山賦 支考 後麿山賦 去来

○巻之三

賦類 附譜

鼠賦 去来 旋賦 許六
揚揮豆賦 毛紈 四騾廬賦 李由
閑居賦 汶村 招竃賦 支考

譜類

百鳥譜 支考 百花譜 許六
山水譜 許六

○巻之四

説類

蓑虫説 素堂 柴賣説 丸兆
閉関説 芭蕉 師説 許六
名阿段説 許六 出女説 木導
雑説 不知作者 愛騾説 万子

艸宇藤説　程已　草刈説　露川

山芋説　吾仲　嘲霄惑説　毛紈

解類

獲麟解　許六　長雪隠解　許六

藪医者解　汶村

○巻之五

記類

落柿舎記　去来　幻住菴記　芭蕉

十八楼記　芭蕉　五老井記　許六

九華亭記　汶村　琵琶亭記　許六

風水二墓記　許六

紀行類

鹿島紀行　芭蕉　南行紀　李由　許六

序類

曠野序　芭蕉　猿蓑序　其角

宴柳後園序　支考　要文集序　許六

近江八景序　千那　画楼繪合序　許六

四絶文章序　李由　麻生後序　許六

銀河序　芭蕉　番椒序　野坡

○巻之六

箴類

飲食色欲箴　許六　聴箴　許六

銘類

机銘　芭蕉　東銘　支考

西銘　許六　茶碗銘　嵐雪

雲華園銘　汶村　飯鮓銘　吾仲

左右銘　芭蕉　是非斎銘　許六

誄類

嵐蘭誄　芭蕉　丈艸誄　去来

去来誄　許六

○巻之七

歌類

挽歌　支考　鄙歌　五首

文類

俳諧発願文　浪化　聖霊祭文　李由

剃髪文　支考　祭猫文　支考

弔古戦場文　芭蕉

断絃文　許六

○巻之八

傳類

公平傳　汶村　東順傳　芭蕉

牧童傳　支考　五郎四郎傳　支考

霊蝨傳　去来　疝氣傳　李由

直指傳　許六

碑類

壺碑　芭蕉　笠塚碑　李由

○巻之九

辯類

詩歌誹諧辯　丈艸　定先後辯　支考

豆腐辯　許六　天狗辯　木導

手足辯　汶村　人参辯　許六

射御辯　許六

表類

雨乞表　許六　嘲佛骨表　其角

讀佛骨表 厚爲 陳情表 支考

○巻之十

論類

旅論 許六 仁不仁論 北枝

蕎麦論 許六

頌類

誹諧頌 李由 蕎麦切頌 雲鈴

酒徳頌 朱廸 石臼頌 芭蕉

讃賛類

西行上人像讃 芭蕉 神農讃 凉兎

義少年画讃 許六 團扇賛 荊口

入學賛 許六 紫芝悪賛 許六

書類

院艶書 目蓮上人報書

柴門辭　芭蕉
瓢辭　許六
示秋之坊辭　支考
示古鏡辭　李由
送新道心辭　文州
燒皷辭　嵐蘭
鉢扣辭　去來
四季辭　許六

風俗文選巻之一

五老井　許六　選

辭類

柴門辭

芭蕉翁

送許六之歸故郷餞別之文

去年の秋かりそめに面をあはせ今年五月の初深切に別をおしむその別にのぞみて一日草扉をたゝいて終日閑談をなすその器画を好む風雅を愛す予こゝろみに問事あり画は何のために好むや風雅のために好むといふ風雅は何のために愛すや画のために愛すといへりその学ぶ事二つにして用をなすこと一なりまことや君子は多能を恥づと云へれば品二つにして用一なる事

感ずべきものや。西ハ又山にて西ヶ峰とし。風雅ハ西をもつて

西ヶ東ハ東となれ。されども師が西ハ精神徹に入て学

端の雲をわするに。其遠遠なる雲ハ西が内ハ前にあらず。

西が風雅ハ。是非其髄乃ごとし。荒まさりて帰る

なしと云らん。敢行。あれのてんのこの力神よりひちらされ

し。あふなる自分が代りども。あわい代なる西又お国し。さ

高麗上代をのがるを見ひしそれさへ。人代ら人所に寄

あかて其ものおれしひをとみると。あまい伝らしとや。

されバ此頃もとの家をかやしくをすゝみて。そを

分ざれらし。はふみの人代被。古人の跡をわりしめ候ハ

石人乃なき跡をらんば。西をわりと候まと。南山大師の

家の名よも乏しくて。風雅も又一統に因りしといひ

灯をかゝげて。素竹の舟にをさて月を開のみ。

瓢辞

許六

蜀の廉かくは。山里と謝しける。張翰ハち隠士に

人おもひまかるも元乃許も売しける。五わ菱れも楽帖

に四明乃細も。今ハ業力二十年あまりて。あまりおさび

しさに。頃は瓢を種とおりし乃手洗ひまや。中

くもたてかり秘で　書付侍る。

兜（カブト）もなくして果つる事なくべからず世の名をすてゝいふべし終までも
有るに若かずの優りきは浪人ひげそりておのれがかの界に
兼好おのれあつかはずは甲（カブト）のよくなきはよごさで兎もしといはず
かまへもわが障子してぞ事なくべし実ひかるゝ事あれど
きゝつけて陋巷（ロウコウ）にありく一瓢のこのむ所賢人の心
知らずハ去るまじ兼好の中にわが心を問ハ人心しるべからず
許由ハかしこしとて捨たりとおもへるおもしろし
にかくすべからず名物もまうけず波に方ハ四時の茶を
入れて置細不ともおぼしきてけり花ハひとつ
うつくしきもなくて楊墨がこゝろざしまけじと源氏の
の名となる事ハ人の勝によりひきつる夕顔ぞ

柳夕がほの楊合客にさゞめきてある由緒をすてゝよく
陰茂（ウイモウ）がしき。名案ありけり瓢をもちいて貧乏神の縛
事をこれなるべし隠士が口ずさみのあがれをすてゝしらや。
考ふる目をも捨てこの瓢も我なき隣人が一命を送りて。
これ全く瓢の罪といはむかくる目ハ度ひさごに何の罪
かあらんかまし仏縁深きゆへ宝也上人にハ推て此人を
をさめ相助けたれきるが乃ち波やかくも欲望
も海老（エビ）すといふとも仏縁乃因としぞゆかしき隠士大きに
赤膚なく酒のみひらき（ブン）のさく論なれど曾て風雅
を志して古人生涯一瓢の楽しみのみ金にハ縁
なりといつて兼好が瓢にて楽とし上下の情也瓢

のかたちをいふも腹信と肥へらつて口おもせまきは何
ぎやぜいくて餅乃入らむからうちものなけきすやし
太笑して酔て云ふ涂洞乃れすゝめらばつけて溺くん
して濁りは輪を押もへりしとひらくかなしくて去てはあいそを

示秋之坊辞　支考

あゝ秋の坊や。加賀の国の世乃秋に。又きたりて旅の旅なる
又袖ばりてわくさげよりんばば又なりしが。人乃ん
まあわらく。彼は一枝もなきことおもひて。湖南の紀行
ときよ。一夜の夢とむすびしが。其夜もあけてもとのまゝし

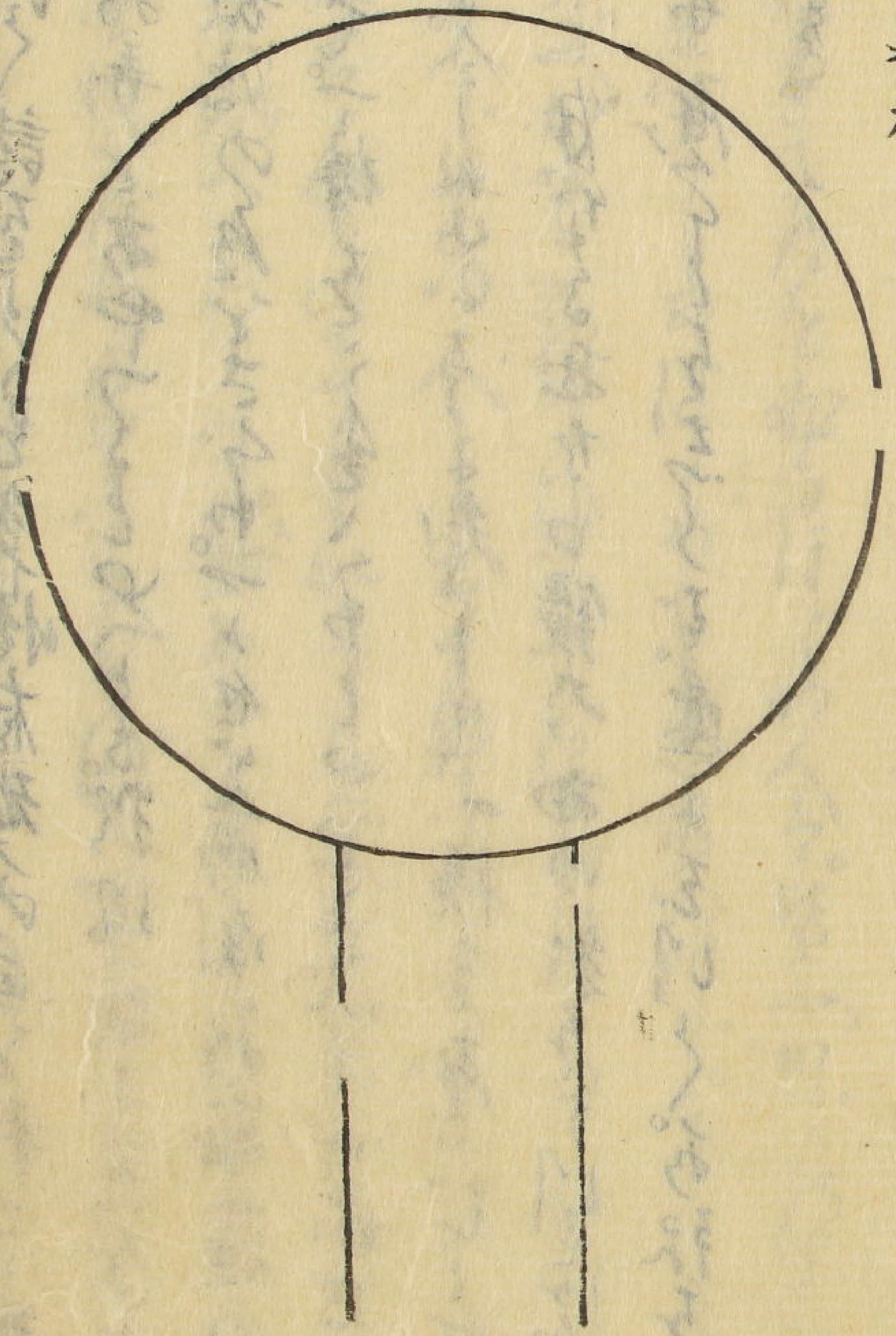
やすらん。おもみしやすらんぜりさる逃遠の一名とあさく先
師も無為まておくれたる中さ袖しら。今は草庵よ。同じ
んよすゝむ人の言るる法師のね信く侍るが。極くね口み談
も侍わてかく住まゐてあやしくさらふとき袖。あ文
あまりまはてあそびで。何某かこすまと其所よみ
まやあらんとぞこの人しもひらひきるなわ。秋の坊が
云ふぜんといはるをなしりん。皆さぞむへりしを。俳諧て
いいしかりんとせば世情におちて。心の花よういろかへなし
花なきは又世の風流なし。世にかそらずすることなりん
ていはゞ師をよおきてはさるをな袖そでてむかへよら
あそよへし。俳諧によばくりもぞ志みまく心をしらんと

世ハ東花坊がごとき。世情のうき名さへてむ。ちんくいのそ
しさ法ニ志くみをなさしんや。
凡ゐるい之つよまれ手や　盧初記

示僧古鏡辞

李由

○むかし僧あり。古鏡をもて。家業にまよひて。東湖の濱に
あそぶ。其ハ濃州関なるべし。など志ば孫六が鍛を得て
紫電白虹輪をとし。六尺のひかりを振ハざんや。天下
治まれるの頃ハまるこそよかるらんさるをむかしハ於今
乃業刀とおほし。僧盛鄉乃先の鏡もうち白界と一とし。今
に茶村の葎にうづもれ残祭のなやしみよもやらんかな。
残る陰の春加道をまきいまとまがふともあるべ
ふふも又なし。



此人かつて詩をよくし。多情有趣の画を彩(イロド)つて。叢雲世に名を弄ことあやつるといへども。風雅に足をとゞめて。敷嶋の名をさぐれば。下は先師関翁の膝下の此まゝにて。一棒をうけしより此かたは。みな浮世の流にもむかず。今や五十年にして。又読を磨(ト)かむとす。風雅ハかりし昨(カ)なるあなたの机の影をうつさんがため。此元年に磨(トグ)事をはじめんとするぞ。遂に其いはく。形を此終に来まさ。

引別れも花のうらみも

第 [illegible]

贈新道心辞

丈艸

世をのがれて名をしるほどの人は。皆一かどの志を発して。まづ其はじめより志あつく。雅じ年にこゝろねのかはりゆくを。又かなしむ [illegible] 人も。その年 [illegible] に侍る。古人も [illegible]。世の人もおもほしぬ。かく [illegible] 心の侍る。世尊を遂べきよし。翫(もてあそ)ぶ [illegible] ぬ。菖月九日にて。みな野に出て [illegible] 鞋(ミハ)の。さびしさのむしなる。[illegible]

すまゐをかまへ、世ハ山寺にかくれこもり給へるよし、侍るゆかりにて
今乃あるじおさなき西行法師の比とおもひあはする也。
こゝろ乃ほどを好みて。拙き辞を申おくりぬ。
蚊屋をわくる文 隣子にあつまる夜乃尺

焼蚊辞

嵐蘭

蚊々。帳中の蚊。汝を焼に辞をもてこれに辞をいひ
汝それがしに死をまぬがれんとしたまへるらせよ。夫澤雉
は樊中にやしなハれん事を願ハしと彼は心をとれり。
こ[illegible]汝を今我をわれに見るべく人の肌にせまるかざしをとらせむ

下に絹をかくしてむ也。
新[illegible]汝を帳にかくれて、草のねにやり、家を汝を帳に入
帳のねにやりなば。あハ[illegible]なるとさ。汝がためとかせんや。
鍾馗[illegible]促織乃声にうくぜ。東山へ行ければもらむしや。西に濡
家にまちくらして[illegible]風をだにもつらし。げに世乃
孫の絶なむるのみぞ。汝の[illegible]事を[illegible]し
汝がやりいれる。何を惜とせむ。義経の[illegible]ハ[illegible]
さしもの須山小家山が[illegible]村ハ[illegible]神の謀をなすといへども
天下のためにして名をのこしたまふ。汝めしいふ也。
劉晨阮肇ハ[illegible]文をさけ。日本武尊ハ[illegible]を[illegible]が[illegible]
共に天にして汝といふべきなり。大盗[illegible]あに[illegible]を

寂むや。汝が姿。まづをつくるに。帽子をかぶらし時は。それ翻(ひるがへ)
の面をうらぶひ。垂(タレ)おりけく。縦横の逸(ヌキ)たるを足ぶ也。また
て。小路の雨をしく。人の志よへまつまく。入てむとくる。
嗚呼(アヽ)踉蹌(ロウキヤウ)が徒(ト)にはあらじ。
まべて汝がおこなふ業。穢(タケ)まるもなく。空のひすも
なし。あり神なるしいふも。やさしきにもあらず
あるむべきものゝ甚しき也。
「鉢。鉢帽子の鉢。汝をやくま辞をもてきし。汝によるは
をきく時は。露まで死をもしとみだりまる神つとむ
「子や帰しむことなき世も鉢の冬ぞ(?)

鉢扣辞

去来

○師走も二十四日。冬もかぎりなれば。鉢扣。聞まつらんと(?)
例の翁のまさわたりしたまふ。こよひは風流(?)をあらしく(?)
わたりて。ごゝろみまうでこねば。かに待侘びまひなきもこゝろぶつや(?)
おもしろく。
「箏に色志似ても人をも辞扣し。亦傳(?)の行うちなし
しくを殺ぬ(ツヘ)也。炎寒をおかし。円(?)めりしぬ神ど物
あり神のるぬしとの。似ぐるべきものあしく。或は神が晩物は。
瓢字をなしし。証打(カタ)千々哉。二人(フタリ)三人(ミタリ)つれてまうでくる(?)。

付合ても俳かいと唱ふ所なり。是世乃俳也。かくて寒の中
と。是其名の彼岸ハ。是又夜を日につぎ。嵯峨乃外七所乃三昧を
めぐらせぬ。無縁乃手向経とふとき袖ハ。かの淵墓も。つまが畜
さ行かしと。いつも出ることなき乃まきに葉茶をさし。大路
小路にまさへ。前小業かいわぬ袖ハ。さ西因にもれば。おもらかぬ
所も辞おとせず。曲聲を戸々さし袖なる。あるいハさらやまを
すわ。或ハ世用にかくれぬ。法師ならぬまでぞ。新夜川を見れ
ど。其袖も墨染にハあらず。おのおのくさ茂の黄に夜の泊。新
ちぢへる後なる後をつけて。是ハ袖ぞ。月にすむ名ハ寂しく思
鉢人も無しぢ侍る。さ袖ハ其角法師が去年の冬。むと
まく森えて出うじと吟じける。ひとり出かり

ざわめき。折から付て。寝ざめらの耳がつぐとやおかしおし
徒ヾしけれして紅しのひける。横におもの紀にわかるひ
する絹りして出来まつぎた花日を見くよりせ紙を出て夜
こちらも其日をおく袖てびわ今にやおわめしんじ夢の
「是嫌乃墓も読る辞ならおしやのくしまひふ
まあるみよ乃くるをそて作わまぬ。

四季辞

許六

古今和歌文章ニ謂フ四季ヲ者多シ矣。假令姿ハ用テ能ク諧フ詞ヲ。尽ス其情ヲ。和歌文章ニ不可更。今此辞ハ全篇以テ財宝ノ之上ニ盡ス四時ノ情ヲ。是誹諧也

行年乃色夜ハ年もへだてしてなりともとし乃去年夜よハ宴をま
子にれ渡りの見てあるを延し。隠坊が御法体をする所なし

人のあるとし時乃月日を。行道ゆきやかに廻て老ての為に哉
まん法を。性よ径路チカミチをも行はきかすれても又年事もあも金
も一杯乃着衣物よりも早く。今ゆ文を年々舞せむとして。
四楽をと翻カヘすとよりもやすし。侍りして世の商梢を
これよ。つまとりあり純なりざらんはなし。世らし紫民おほくの民
乃梅終よも算ちりて時あるとかわるあり猶ゆをのぶべく。讃ほめ合の
何の純をいと深じ。世こそ店主さ乃ゑそうるはは只ぞ汰めれ
手軽なして。神仏とても及びことし。ましこ甚みね梢
乃川市相より。八翔翠言の誉そ生りてわぎ語合頭乃
手柄として下万民の来しせそ。子代りあり保代をすらん
ことも何事をあるもとくりし也。金子の威勢して大判ら

課ナダデ出仕し。白銀を付書テダイとして早少しまるるとも元よ紙
持かつ名まの手よ落て当ざりし一貫文を取としおきす箸ガシ
蝿臈し捉さでも升み中お今おもって。皆打息よりてぬかさ
これで出宗川をもせぬ人は上八月乃桜よきつ間にして。さいなよ纏
仁も出るき神て。譲はら次もとかかも也。え了す条乃ま上
旋よわずよ浅川の神しそふまそる神く細き究うり
世乃中をは唐く針でみをえそれおよ。梅を花乃見しともや。ま
の店やりるよ咲くの。墨お中石滞石コジをはるふ深。浮もり河さ
乃一之猫嘆き袖て。何を子みをなりも色としいふすずし。南鐐のつき
酒権をこみむ水し蓮。柳連翹乃黄色よ。葉そそぐ上山吹
お安くくらさすゞる。かん乃大判お禄をらしやむら。あるの金

発句もまたハ其上に似せ合せ同類なしとすへし。まねさるへき二具
またすさしき鴫の羽かきさわかしく月影うらうらとして南乃隠士拝
在て。花ちる木のかけふかくゆるひかへる事乃ほか様をくはしく
説まうすゆゑんとおもはれけむなるを其風をみて余
兎角に。此躰かくれなき名あかしきもの也と知てとゝめかし
て逃なやめとの嘆くを取り扱ひ。静邉流門まゑて徒
て。流乃うら降り鐘入も申しぞ礼もうけさせてやらん膝
をまへつゝ淵かくる合てきいたゝける詫して矢饗ある菓子
詠る湯気の立上りて揚る神その賞に取るゝを賀
たゞそろて娩しとぞりおぼえける。附日ぞ神千とせや
諸教者乃稲荷森御簾の中よりおもふ乃数稀也。

先てさせすまふの相撲あそて読みれさ神は仏ともいやまし
あしき其かん今乃庸を翁は閑浮禮会を最上として仰し。
格御楽よは今譲をと補となやいづまとみ佛神よ論てくる誠
乃響なるよめとして其まゝ窮ぬいなし。世の中なる人乃心わか乾き有
けはつともやさしく。翁をは白くりよ長じて田舎の合歓へとまへて
紅乃花あふなくせわなき也へし。西東乃路び不二蘭水の香寄
とかへて論なりし。今一足もまてみかくし。桜を雪りかて
是を何れても吉野を花乃名所といへる。飯貝に昼田
乃静謐よわ。来れる乃ごときをつくらんとも卯の花て弥勒乃
代をはよふべきな今ともやびりよわ世の人ある面白しとし世
またしわなるを砕りし中なりもされ。はれしき渡の重

き。卯月のすゑつかた早くくる山里の植木の賣ハ何を
卯乃花とらやこゝろむ。錫も鉦も。色ともに白銀乃簪
なるべし。牡丹乃花の何ならずさらに此世に稀なる紅ぞ
長安の豪富へ見てあそれ。八魂をうばゝるゝ
ゆ新雨なるに不そ。小判を植えて酒むるなど談べし。
雪雀を経日に轉る。手鞠をまげて何ともなう池鯉鮒
所乃馬市なと長じ。丁字を日光以下何なとゐなるひ
さるに馬買の訶して。みづから十粒しなふへてうるん
御楽が謹合をとく皆あてゝよ。条わうる様女郎所乃大なひ
蓬の標蒲の本まして廣野の小屋のをさでぞ
まね。たゞし星あれたる銭なるべし。やなし祭。食なるら打

てぎ。春野に花は起る間は茶をひとゝ見かゝし経を
閑かす。ど畠砂乃田植さへおとなしく例乃五月雨ふりつゞき
舟くだり市に賦を府矢矧辺を経て伊勢にまで大井川
此あたりく。播田舎若に陣を張大名小名いへりうら越れ
栗乃川し。いちえうわ松乃んと白見し。此川所の一分小判
乃ちゝうきこれ閏さひるとさずの純。梅雨晴の日和えき
て。空に雲なく。植田湍つし。天地は啼の数々に鳴ひし
か。神一日にの暑さしもうちえて。まゝ世々かるにさかる十九土用
とかや。京田舎熱病にまる純所し。かれしあらい寒でみか
てゞ。医薬所乃鬼も其功なく。験者乃いのりもうへま
ば。此雨なんとや。世よろしき事ありて皆ら不に醒へ〜これをそ

あきらかの鶴よりて黄金を蔵しまする事なき故に唐土にて風雲
の志を抱きまで神をも辞せず然れば金気世にかなふ
の徳にて皇金の気もうちるまゝ是に依て金は華葉布など
まで丁寧に発す事を慎くうるをもつて国の世の中ずつゞく
巡れる事をはかれば金の運行を巡る事が判じ也
あるしもしかし饒なには濯家に入たる事に依て撰
よそよりみある事を出家世間の中也やぞそわけ合して一粒包を
て世俗をまもることをりもしとあるしとあい故なれやさしく生涯
の養父入る所とて議えある心といならぬ彼家を尋るとて
市世田をもかきわと定め世界の金銀をせ時一を我里に
出で向へなりべしまで一平さの飯のみはなくしよう

てこそ様よりえらしの中にとなるまでいわも安穏なり御
がへとかいふすれりふかぞやごいきればおもてより新をさぐりてとり
おすふまき節をついましく大秤によりて昆布干鮭の類
をすゝめある家を売家建をとりてぐいれ金銀楽の
道の人のつゆ不足俳諧師也いふもをかし松鶴家治の秋
をうしやさ山秋をまで見姨捨文字の月をながめて一夜籠
有馬をまで見込み筆のかえを継ぎて尾をなおして
十日まで向きかけ蔵の下に旅寝して一夜二夜いねず秋ぐく
大逗留によ飽きなれるまちもりされの袖の露ぢからまとえ
せうくあるの也秋も又やまぬ事とて菊の名の立く笛をを
回とも裾東に離ともふとかの様も金銀をもうしやむまくなりぬ

何百ともしるべし。諸家にて鏡開(ビラキ)とて。名高の宝なるべ
銀流(ギンナガシ)に似(にせ)く。金ばくのそくうきなるべし。霜月朔日ゟ
野郎乃顔みせ也。給分も小判也。むかし公家様堺町と新
ならび中なるが。ぬき屋町。天下に金をまうけして。まずは
いたすもさる山ところおつかんを銘うち小勝色とや。乙子(オトゴ)朔
日とて。銘々手みの事初る日也。元より黒いのみ乃気色
江戸乃二ヶ所。恋塚の山むかし。先皆にほ男子の香ひを乃具
ある社にある。是羽の鶴にきもなし。嵐吹(つ)かるし庭かぞ
し。是新の里にみとこめ。何を押花乃年々たく。今
一般よ貴賤くわ。かの色小判。大名借にて乞して年頭を
あつべき家の前にかぢ枕。役所へなるふ小ざる袖行の鄙(ヒナ)乃

様腹ぞ。あつい袖なる。神も人乃額(ヒタヒ)よ凡て威(ヰ)をまじと
るや。伊勢熊野乃お神尾時蒔代る銀一枚。衣服(キヌクバリ)は小判なる
べし。まで小謀と唯(タダ)。餅と蕎麦く。卅九日といふなれ。なれ
小乃大晦日。一日は遠ひ…ぬ。一年中は大油断。
今は時よあるくは袖をあわ。三千世界乃今銀ものよふ一足お
秘世よえて入ても袖し。あてる床さい衛不路てらしく之
あるかへく。あり家も乙(ステ)よ差よなわ。称中をもと行ら袖
代わ皆つわく。お日紀国乃撥びの事まで。天下泰あれく
てる袖をおさむ。さる袖と束の代はあく別く。和哥乃道よ
将なる。されは今も世目よ見ん夜鬼神をなうし。武ずおさて
女乃中をやはらげ。たけきもののふは心をなぐさむる

まねきこし神也。上古よりためしおほし。ありのまゝに神をまつれ
もさるにてはなかりけり今の世ハ八けいをねがふ事かなハぬ人の
界までも一日乃逗留なりともあるまじき事なる事なり
べし。